聖霊降臨節第 14 主日　説教 「心身に刻みつける」要旨

牧師　黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会　2024 年 8 月 18 日

マタイによる福音書　25:14-30

8 月は平和月間ということで、平和ということを念頭に置き、毎年、礼拝が献げられています。そこで私たちの覚えるべき平和とはいったい何かということでありますが、それは、戦争のない状態だけを言っているわけではありません。平和とは主の平安、つまりは、主の祝福に満たされた状態、それも、密やかに自分だけが、ということではありません。人も動物もすべての生命が穏やかで満たされた思いをもって過ごすことが許されている、聖書はこの状態を平安、シャロームと言うのです。だから、預言者イザヤも平和についてこう語っています。「狼は小羊と共に宿り　豹は子山羊と共に伏す。　子牛は若獅子と共に育ち　小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる」と、神様の祝福が実現されている様をこのように語るのです。それゆえ、そこで大切なことは、この与えられた神様の恵みを互いに分かち合うということです。そして、それが許されているのが主の安息の中に置かれた私たちでありますが、では、その本質は何か、それは、一言で申せば、笑いです。

そこで、この「笑い」というところから、劇作家の井上ひさしさんが以前こんなことを言っておりました。「悲哀や不安は、人間が生まれながらに持っている感情であるのに対して、笑いは違う。」と。そして、この言葉の最後を「だからこそ、人間の行為で最も価値の高いのは笑いだ」と井上さんはこう言葉を結んでいたのですが、ですから、井上さんのそうした思いは、彼が作詞したひょうたん島の主題歌の中にも、はっきり語られています。「苦しいこともあるだろさ、悲しいこともあるだろさ」とあるように、生きるだけで辛く苦しいのが私たち人間の宿命であるのは間違いありません。しかし、そうであればこそ、井上さんはそれに続いてこう言葉にしているのです。「だけど僕らはくじけない。泣くのは嫌だ、笑っちゃおう」と、そして、この「笑っちゃおう」というところは、そのまま私たちキリスト者に当てはめることができるように思うのです。それは、主が共にいます私たちにとって、主がいますがゆえに、そこには自ずと笑みがこぼれ落ちることになるからです。それゆえ、私たちの信仰においても、この「笑い」こそが最も価値の高いものだと、そのように言うことができると私は思います。なぜなら、主と共に歩む私たちの振るまいを愛と呼ぶことができるなら、笑いは愛から流れ出る一滴であり、それゆえ、笑いは、私たちが平和をを築き上げる上での原点となるのは間違いないからです。

従って、そう考えるなら、神様が私たちに求める忠実さとは、しかめっ面で現されるものではありません。そこには必ず笑いがあり、それも、笑え、笑えといった具合に強制され、引きつった顔で笑わなければならないものではなく、自ずと笑みがこぼれてしまうもの、そういう性質のものだと思うのです。そして、それは、自分一人だけが、ということではありません。譬え話の中で、イエス様は「もうけ」「ということを強調しておりますが、パウロが「 弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。」（Ⅰｺﾘﾝﾄ 9:22)とこう語っているように、私たちにとって、何かを手にするということは、自分だけを喜ばせるものではないからです。むしろ、自分よりも人を喜ばせるもの、だから、それをご覧になって神様とイエス様も同じように喜んでくださるのです。イエス様がこの譬え話の中で「主人と一緒に、喜んでくれ」とのフレーズを２回入れているのはそのためです。それゆえ、忠実であることの本質は、井上さんの語る「泣くのは嫌だ、笑っちゃおう」という、この笑いと相通じ合っているように思うのです。

ですから、ひょっこりひょうたん島の主題歌の最後が、「進め一、ひょこりひょうたんじま、ひょっこりひょうたん島、ひょっこりひょうたん島」とあるのと同じように、笑いは私たちに励ましを与えます。よーし、よっしゃーと、人をしてそう思わせ、人と人とを繋ぐ働きをなすのです。そして、それは、この譬え話もそうです。ここで語られていることは、内容としては、パッと見た目は恐い話なのかもしれません。ましてや、最後に語られている「誰で

も持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」というこの一言は余計にそう強く感じさせるものでもあるのでしょう。けれども、この譬え話を神棚に上げて、恭しくかしこまって聞くのではなく、親が子どもに読み聞かせるおとぎ話や昔話を聞くように聞いていったらどうでしょう。それは、イソップ童話やグリム童話に出てくるお話のように聞こえてくることはないでしょうか。ですから、この話は教訓的で説教臭い話というようりも、私たちにその姿を想像させ、思わず、クスッと、笑いを湧き起こさせる、そういう類いのお話しなのではないかと思うのです。まただから、聞く子どもたち、私たちも、そこからイエス様が伝えようとしている大切なメッセージを聞いていくことになるのです。

それゆえ、私たちはこの話を他人事で終わらせてはなりません。自ずと笑いが伴うということは、私たちをしてその使命、役割を自ずから引き受けさせようとしているからです。ですから、そういう意味では、忠実な僕たるべく私たちの背中を押すものだということです。そして、それは、そこで私たちが互いにその役割を担い、笑いを共有するからこそ、ひょっこりひょうたん島の主人公たちのように、あらゆる場所で、あらゆる人たちと深く関わり、そして、この交わりの中に様々な異質な人々をも招き入れて、神の民として私たちは成長することになるのです。ですから、私たちがもし、世界人類が平和で満たされ、神様の祝福のもとに生きることを願うなら、喜びとそれに伴う笑いは余計に欠かせません。ただし、そこで笑いが伴うためにはもう一つ、私たちにはなくてはならないことがあります。それは私たちが完璧であることを止めることです。

要領が悪くても、気が利かなくてもいいのです。なぜなら、安心して失敗し、間違えることができるところでしか、誰もを安心させる笑いが湧き起こることはないからです。ですから、誤解のないよう一言付け加えますと、今申し上げている笑いとは、人を傷つけても平気でいられる、そういった悪ふざけの類いではありません。しかし、かといって、愚か者に愚か者と言えずに、すばらしいとおべんちゃらしか言えないような、そういうつまらないものでもありません。私たちが間違いや過ちを犯すということは、馬鹿馬鹿しい限りのもであり、誇らしくもなければ、褒められたものでもありません。でも、そこに笑いが湧き起こるのは、神様がすべてを受け止めてくださっていることを私たちが互いに了解しあっているからです。大人も子どもも、さらに言えば、犬も猫も、安心して笑うことのできるところ、教会が神の家族と呼ばれているように、その笑いとは、サザエさんやちびまる子ちゃん、はたまたドラえもんなど、子どもが見ても安心して笑うことのできる性質のものだと思うのです。ただし、それは、今、世界で起こっているような、聖書の価値観以外の一切を認めないといった、そういう偏狭なものではありません。

そこで考えたいことは家族というものがいかなるものかということです。家族であることの前提は一緒にいることです。仮に離れていたとしても、一つである、一緒であるという、このことを忘れずにいることです。そして、この思いを強くするために必要なことは、一つところで一緒に過ごし、良いものもそうではないものも一緒に分かち合う経験をすることです。それは、すべてを分かち合おうとするところで強くされるものが家族の絆であるからです。そして、それを経験してきたのがイスラエルであり、その一員であったイエス様でありました。私たちが「一所懸命」に神様の御言葉に生きようとするのはそのためです。ちなみに、この一緒にいるということは、一生懸命にすることではなく、一所懸命にすることです。一つのところで懸命に生きようとするその姿をさして一所懸命と言っているのです。今は、生涯にわたって力を尽くすという点を強調するためなのでしょう、一生懸命という言い方が主流となっていますが、日本語の本来の使い方としては、一所懸命に、というところが元々の形であったそうです。つまりは、一蓮托生、運命共同体的な場所に身を置くこと、それが一所懸命の意味であるということです。

ですから、そこで求められることは、こうして一緒にいるということです。そして、一所懸命に生きることを私たちに語り聞かせてくれているのが聖書の御言葉でもあるのです。それゆえ、この点だけを見ていくなら、聖書の世界は私たち日本人から見ても決して遠い世界の話ではありません。感覚としては近いところがあるように思うのです。そして、これは時々感じることではありますが、西洋より東洋に近い感覚を聖書は持っているとそう思うのです。ですから、この近さといったものを改めて心に留めたいものですが、けれども、この近さは、私たちを慢心させ、思い上がらせるためのものではありません。この聖書の世界と私たちとの近さは、私たち一人ひと

りが神様の恵みを同じように分かち合っているところで感じるものであり、それゆえ、そこには何一つ、差がない、同じだということです。つまり、体の大きな者も小さい者も、走るのが早い者も遅い者も、物覚えのいい者も悪い者も、さらには、勉強のできる者も苦手な者も、見栄えのいい者もそうでない者も、神様の御目にはすべてが同じように映り、だから、私たちはそれぞれに与えられた恵みを喜び、また分かち合う者とされるのです。そして、そのことは、イエス様が５節に「それぞれの力に応じて」と語るように、今日の御言葉の中でもはっきり語られていることなのです。ですから、５タラントンを手にした者も、２タラントンを手にした者も、神様の目からすれば、そこに差はありません。同じように良くやったと言われる忠実な僕の一人ひとりであるのです。

従って、私たちは誰かと自分とを比べて、落ち込む必要はありません。それぞれに与えられている賜物は同じでなくても、その賜物を生かし、自由にのびのび生きることが許されているのです。そして、それを誰よりも喜んでくださっているのが私たちの神様であり、また、この思いをもって御国に凱旋されていったのが私たちの信仰の先達の皆さんでありました。ですから、私たちに求められていることは、自分らしく生きることです。神様に愛され、守られ、導かれる者として、それぞれの賜物を生かして、神様に喜ばれるべく生きること、それも、周囲を笑いで包むように、その賜物を生かすこと、そして、それが身体に刻まれた結果として与えられるものが、ここでイエス様が仰る忠実さであると思います。そして、それが私たちに強く求められているのは、そこに私たちは大きな実りを得ることになるからです。ですから、そのためにも、私たちは、自分に与えられている賜物が何か、自分のいいところも悪いところも、よく知っておく必要があるように思います。

ただし、その場合ですが、自分が悪いと思うところ、つまりは、欠点ということでもありますが、それをそのままにしておくのはどうかとは思うのですが、けれども、欠点をまるで獅子身中の虫のように敵視して、取り除く必要はありません。なぜなら、それも神様が私たちに与えてくださったものであるわけですから、自分好みの自分になろうとして、無理に欠点を取り除く必要はないからです。パウロが「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。」（Ⅰコリント9:19）とこう語っているように、もし気に入らなければ、意地を張らずに別の用い方をすればいいだけの話だからです。なぜなら、忠実であるということも、また、笑いを共にするということも、何から何まですべてを自分で決めなければ気がすまないというところに約束されてはいないからです。神様にすべてをお任せして、そのお言葉どおりに人と分かち合うところ、ここからすべては始まっていくものだからです。そして、ここに神様に造られた私たち人間の人間たる所以があるのです。

神様に似せて作られたのが私たち人間です。それゆえ、人間の尊厳とは、神様から離れたところに見出すことはできません。私たち人間が神様を必要としているのはそのためです。ですから、聖書の御言葉に従うなら、何人たりとも、神様の似姿である人間の尊厳を冒すことは許されません。それゆえ、人の命を奪ってもダメ、人のものを盗んでもダメ、偽りの証言をしてもダメ、人を苦しめるかのように貪ってもダメ、人を精神的、身体的に苦しめることは絶対にやってはいけないことなのです。ましてや、イエス様の十字架と復活の出来事によって救われ、神様を信じている私たちであれば、そのように人間の尊厳を冒すことなど絶対にできないはずなのです。ところが、どうでしょう。それにも関わらず、神様が望む平和を実現するどころか、もっとひどいことになっている、それが、今私たちの置かれたこの世界の現在の状況なのではないでしょうか。

それは、私たちが「怠け者の悪い僕」だからなのでしょうか。それとも、「臆病」だからなのでしょうか。ただ、何人も誰かのことを勝手に怠け者、臆病と決めつけいいはずはありません。かつて国策に抗うすべての人々を「非国民」と決めつけたように、人の評価ほど当てにならないものはないからです。しかし、神様と自分自身だけは、自分が何者なのかがはっきり分かっているように思うのです。ですから、この「怠け者の悪い僕」と言われた男は、そういう意味では自分のことがよく分かっていたわけです。それだけではなく、神様のこともよく分かっていたのです。ところが、神様はこの男を「怠け者の悪い僕だ」と決めつけたわ

けです。しかし、彼は、何一つ悪いことはしていません。人を傷つけることもなければ、苦しませ、悲しませることもありません。ですから、そういう意味では、神様の戒めを忠実に守り続けていたのがこの「悪い僕」と言われた男であったわけです。ところが、神様は、何の失敗もしない、過ちすら犯さなかったこの男のことを厳しく咎め立てて、「この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう」と、こんなひどい言葉までも浴びせかけるのです。

ですから、ここに来て思うことは、もしかしたら、いや、やはり、どこまで行っても笑えない話なのではないかということです。それは、私たちのその足下を見たとき、自分自身も、周りの人たちも、この世界に生きる人々すべてが、「怠け者の悪い僕」という烙印を押されたとしても仕方がないように思えるからです。けれども、御言葉に聞いたように、笑いこそが神様が私たちに望んでおられることなのです。なぜなら、神様が私たちに望んでおられるものは、私たちが苦しみで顔を歪ませ、うめき声を上げながら最期を迎えることではないからです。ましてや、誰からも顧みられることなく、人間の尊厳が踏みにじられ、そのまま朽ち果てていくことでもないからです。もしそうであるなら、御子イエス様を与えてまで私たち人間を救わんとしたのでしょうか。それゆえ、今のこの現状を神様が決して喜んでいないのは明らかです。人間をその似姿として造られたのであればなおのこと、私たちの苦しみや悲しみを、身が削がれるような思いをもってご覧になっているのが神様であり、イエス様であるはずだからです。

従って、今、私たちに問われていることは、忠実であるかないかということではありません。忠実さは一つの結果であって目的ではないからです。話が終わったわけではない以上、御言葉を信じ、神様とイエス様の願い通りに私たちが歩んだその結果として現されるものが忠実さと言われていることだからです。ですから、私たちは、こうして与えられている賜物を後生大事に抱えて、奥座敷に陣取って、何もせずにいるわけには参りません。私たちにはやるべきことがあるのです。それが、失敗や過ちを恐れずに人と関わり、関わりながら、神様からの恵みを分かち合うことです。だから、こうして神様を信じる私たちには、そこに笑いを生み出す力が与えられているのです。ただし、それは容易いことではありません。特に今、言葉が痩せ細り、言葉本来の力が伝わりにくくなってきている中ではとても大変なことです。例えば、安心して、と言われてどうでしょう。絆という言葉を聞いてどうでしょう。言葉だけが頭の上を通り過ぎていくだけということはないでしょうか。このように言葉だけが浪費され、消費されて行っている現状においては、憂慮し、賜物を抱え込んでいるだけでは、行き着く先は、笑えない話ということにもなるのでしょう。しかし、そうであるからこそ、私たちは、笑えない話を笑える話にしていかなければならないのです。そして、そのために、イエス様は聖霊を送り、その私たちと共にいてくださっているのです。

では、そのために私たちは何をしなければならないのでしょう。それは、ブレディーみかこさんの言葉を借りるなら、他人の靴を履くことを厭わないことです。それは、ぶかぶかで、あるいは窮屈で、もしくは、臭いすら漂っているものなのかもしれません。だから、それを自分の靴にすることは難しいことのようにも思います。けれども、履いてみて初めて分かることがそこには必ずあるなのです。そして、イエス様の言われる分かち合うということも、また、笑いということも、履いてみるところから始まっていくものでもあるのです。ですから、人の履いている靴にケチをつけることが私たちのすることではありません。もちろん、自分の履いている靴を無理矢理人に履かせようとすることでもありません。履いてみる前にああだこうだと言っているだけでは、忠実さにこだわるがあまり、悪い僕と言われてしまったこの男と何が違うというのでしょう。それゆえ、この譬え話はこう思うのです。浴びせかける言葉は非常に強いものではありますが、けれども、それは、イエス様の愛の強さの裏返しなのではないかということです。

どうしようもないほどにダメなものであるからこそ、その目を覚まさせるために、厳しい言葉を投げかけているのがイエス様でありました。そして、このイエス様の限りのない愛に触れたとき、このどうしようもないものが笑いへと変えられていく、そのためにも、私たちは、こうして共にいる人の靴を履くことが求められているように思うのです。その人を理解し、終わりまでを共に歩み続けることを私たちは求められているのです。そして、それが一緒にいるということであり、まただから、一つところに身を起き続ける中で見えなかった景色が見えてくる、忠実さは、その一歩一歩の歩みの結果として、私たちに必ず与えられるものでもあるのです。祈りましょう。